四捜査班 御堂レイカ

痴漢鉄道の亡霊

小説 綾守竜樹
挿絵 ＺＯＬ

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

第1章　9月×日（木曜日）18時00分　紫園都市駅　006
第2章　9月■日（金曜日）04時30分　明鏡大学前駅　044
第3章　9月■日（金曜日）07時30分　みどり台駅　071
第4章　9月■日（金曜日）08時15分　みどり台駅　086
第5章　9月■日（金曜日）09時35分　紫光寺駅　112
第6章　9月■日（金曜日）11時35分　みどり台駅　175
第7章　9月■日（金曜日）18時00分　明鏡大学前駅　195
第8章　9月■日（金曜日）18時58分　みどり台駅　237
第9章　9月□日（土曜日）07時00分　明鏡大学前駅　252

登場人物紹介

Characters

御堂(みどう)レイカ

警察庁の外郭団体、被害者心理研究所に所属する囮捜査官。実力に裏打ちされた自信に満ちあふれる金髪の美女。

藤堂(とうどう)ゆかり

捜査にあたるレイカに対してたびたび警告を発する不思議な少女。神出鬼没で、レイカの行く先々に出現する。

千手(せんじゅ)

曙線を根城とする痴漢集団「千手観音」のリーダー。

（……なるほど。ホームに並ぶところから始まっていたわけね）

かなり組織立っている。ここまでしっかりとした連繋プレイができるなら、とレイカは胸のなかで呟いた。草サッカーチームでも作れば良いだろうに。ああ、サッカーは手を使えないスポーツだったっけ。

『運命』が奏でられ、ドアが何度か開け閉めをくり返して、やっと閉じられた。クーラーがブリザードの強さで吹きつけられ、熱気ムンムンの車内をムリヤリ冷やそうとしている。ちょうど排気口のしたに押されてしまったレイカは、冷凍食品の気持ちがよくわかった。ホイッスルが鳴らされ、電車がいかにも重たそうにエンジンの唸りをあげる。

分単位の密室が生まれる。

レイカがブローチを外して掌に忍ばせたとき、痴漢グループ「千手観音」がついに牙を剥いてきた。10人の瞳がいっせいにレイカを睨みつけて、さりげなく近寄り、あるいは周囲に対して壁を作ってくる。

（……どうする？　ミッション目標を変える？）

ざっと見たところ、10人のあいだには上下関係があるわけではないらしい。M男の話に出ていた幹部連中はいないのだろう。

レイカは心のなかで首を傾けた。末端たちを潰していくのは簡単なのだが、それではトカゲの尻尾作りで終わってしまう恐れがある。囮捜査において、アクションはすなわち

「情報漏洩」と同義語なのだ。
ジリジリと攻囲網を狭めてくる男たちを値踏みして、レイカはどいつもこいつも小物であると判断した。ここはまだ、こちらの正体を明かすべきではない。無力な女らしく「痴漢」と叫び、次の駅で降りてしまおう。
背後に陣取っていた大学生風のロンゲが、首筋めがけて手を伸ばしてくる。痴漢をしかけるにしては、珍しい第一手だった。ロンゲの人差し指がうなじに触れてきた瞬間、レイカは腹の底から大声を張りあげようとした。
――パシッ！
季節はずれの静電気でも発生したのかと思った。ロンゲの指先から電撃に似た何かが伝わってきて、レイカは用意した声を潰されていた。すぐに気を取りなおし、ロンゲに振りむきながら吼える。
『やめてくださいっ！』
おかしい。
叫んだはずなのに、聞こえない。
『……ムダだよ。アンタの声は封じさせてもらった』
ロンゲがニヤニヤ笑いを浮かべていた。日焼けした肌に映える金のネックレスが、ひたすらいかがわしさを強調している。

『でもさ、オレたちにはアンタの言っていることがわかるんだな……好きなだけ叫んで、泣いて、喘いでくれよ』

ロンゲの左右にいた背広姿と小太りが、呆然としている（ように見える）レイカの両腕に、子泣きジジイよろしく抱きついてくる。

『不思議だろ？　千手さんから教えてもらった秘密のテクニックなんだよ。コレのおかげで、相当ラクさせてもらっているんだぜ』

これが「沈黙の技」とかいうヤツなのだろうか。

レイカは首筋のあたりに意識を集中させた。特に異常は認められなかった。ツボか何かを押されたか？　しかし、発声を止めるツボなど聞いたこともない。それに、どうして向こうも声を出さずに意思を伝えてこられるのだろう。

脳裏に一瞬、ゆかりの顔が浮かびあがった。千手観音のリーダーは幽霊であって、オカルトな力を持っている。彼はその力を使って、グループを――。

『……ああっ、離して！　やめてくださいっ！』

馬鹿げた考えを振りはらって、あくまでも乙女の範囲で暴れ始める。だがグループの包囲は完璧で、ほかの乗客たちはまったく気づいていなかった。グラサンをかけた中年が背に密着してきて、レイカの腰を抱き、髪の匂いを吸いこみ始める。

『芝居はヤメなよ、捜査官サン』

ロンゲが唇の端を吊りあげた。
『６本前の武勇伝は、もう伝わっているんだよ……千手さんの情報収集能力は、エシュロンなみなんだからな』
『……つまんない冗談ね』
バレているのならムダな演技をする必要はあるまい。レイカはガラリ、と態度を変えた。怯えの表情を仮面みたいに脱ぎすて、冷たい怒りを滲ませる。両腕を押さえている背広と小太りが、かすかに身を引いた。
『フーン、それがアンタの本性か……なるほど、こりゃ迫力あるな。ヒョウっていうかジャガーっていうか、そんな感じだ』
『でしょ？　噛みころされないうちに、おイタはやめておいたほうがいいんじゃない？』
壁役をのぞく全員が、イヤな笑い声をあげた。
『心配していただけて嬉しいね……で、どうするんだよ？』
レイカはニッコリと笑った。ナイチンゲールにだって負けていないスマイルだ。
『こうするのよ』
両手をくるりと回転させ、背広姿と小太りの金的を力まかせに握りつぶした。
『……ッ！』
レイカの握力は、瞬間最大だと体重の２倍に達する。Ｍ男の手首をちょいと痺れさせて

やったように、レイカは手だけで相手を無力化することができるのだ。
男の魂をコリッと鳴らされて、左右の2人が真っ青になった。レイカはすかさず肘を曲げ、膝の曲げのばしを利かせてシーソーのように肩を動かした。前かがみになっていた背広と小太りの顎に肘のアッパーを喰らわせ、ついでに腕を抜きとる。間髪入れず踵を振って、グラサンの弁慶に安全靴だからこそのハンマーを叩きこんだ。
ブタのような悲鳴が、三方向から噴きあがる。レイカは笑みを張りつけたまま前進し、ロンゲに貼りついて股間に膝を入れた。
固い。
サポーターか何かをつけているのだろう。戦術ミスを悟ったときには、ロンゲの手にスタンガンが握られていた。首筋に押しつけられて、今度こそ本物の電撃を味わわされる。
『……くッ！』
『い……い、いやはや……何とも……まあ……』
よほどビビったらしい。ロンゲが意味のない瞬きをくり返している。無力化したレイカを抱きかかえながら、逆襲を受けた3人に安否を問うた。3人は弱々しく頷き、レイカに対して復讐心に燃えた目つきを向けていた。
『……こりゃ、最初が誰かってのは決まりだよな』
背広と小太りとグラサンが、レイカを引っぺがすように奪いとってきた。左右のつり革

を引っぱって力抜けした両手をねじ込ませ、ビニールテープを巻きつけてくる。ラジオ体操の胸の運動じみた姿勢で拘束してしまうと、憤懣をぶつけるように襲いかかってくる。

『よくもやってくれましたね』

背広姿は、いきなり股間に手を差しこんできた。厚手のスカートのうえから、内腿を含めた微妙なカーブを撫でまわしてくる。小太りは突きだしぎみの美尻に取りつき、むっちりとした脂肉を乱暴に揉みしだいてきた。グラサンは脇のしたから両腕を伸ばし、たぷたぷと揺れる双乳を力まかせに揉みしだいてくる。密着させられたワイシャツ地から黒いブラジャーが透けて、艶めかしいコントラストを盛りあげた。

『ホントだよ。ボクが子どもを作れなくなったら、どうするつもりだよ！』

小太りが早くもスカートをたくしあげて、ナマ足と尻を露出させる。赤い垂れ幕のしたから現れた雪色の下肢はハッとさせられるほど鮮やかで、最後に黒ショーツのアクセントまでついて垂涎モノの艶めかしさだった。

『あー、痛ぇ……コイツ、トラックに踏まれてもだいじょうぶな靴を履いてやがるぜ。一見してわからないようなエモノを選んでいるなんて、凶悪だなオイ』

グラサンがワイシャツの裾を引っぱりだし、背中に腕を潜らせてくる。ブラジャーのホックを外し、ストラップを切り、あっけなく剥ぎとった。

『……あっ！』

レイカの体温とカボシャールの匂いがたっぷりついた黒布を丸めて、ひょいと後ろに放る。待機していた黒縁メガネが、エサをまえにしたウツボみたいにキャッチして、取れたてホヤホヤをすかさず鼻に押しあてた。どうやら重度の下着フェチらしい。肺活量の限界を試しながら、彼だけの桃源郷をさまよっている。

『……おお、まろび出してきましたね。のっしり、のっしり……胸板のうえに別の生き物が巣くっているみたいですよ』

双乳が以前にも増して布地を押しだし、さらには頭頂を透かせている。やや紫がかった乳暈はキウイのスライス大で、その中央にある乳首は食べごろサイズのイチゴだった。

『ねえ、何で脱がさないの？　もうバリケード張ってあるんだしさあ……』

『……バーカ！　ワイシャツのうえからヤルってのがイイんだろうが！』

小太りを罵って、グラサンが本格的に胸をまさぐり始めた。乳肌、特に色違いの部分が裏地に擦られ、微妙な研磨をかけられる。

（……くッ！）

レイカは気づかれないように奥歯を噛みしめた。囮捜査を展開している以上、女体を嬲られるのは覚悟のうえだ。弱点を探りだされ、悦びに心を乱されない限り乗りきれる。ここからしばらくのあいだが正念場だった。

『けっ、スタンガンで全身を弛緩させられているクセに乳首が立ってきやがったぜ』

『……そんなに……力を込めて揉まれれば……』
演技には、微妙なさじ加減が必要になる。
『……痛くて緊張させられるわよ……もう少し上手に揉んで欲しいわね』
とぎれとぎれの挑発を聞かされて、
『あー、ワリぃワリぃ。あんたみてーなジャジャ馬が、マイルド派だったとは思わなかったんでな。じゃ、これならいいだろ』
グラサンが左右に視線を飛ばす。背広姿と小太りが、心得たように頷いた。グラサンが双乳の付け根あたりをつかんでワイシャツをたぐり寄せ、元からピッチリしていたそれをさらに密着させる。乳暈の微細な突起まで浮きだしている頂きに、バーコード頭とニキビ面が吸いついてきた。
（……ッ！）
レイカは気づかれないように両手を握りしめ、靴のなかで爪先を丸めた。
（集中よ、集中っ！　必死なのがバレないように耐えるのよ……）
布地を挟んで、粘膜と舌の蠢きが塗りつけられてくる。背広姿のほうは体温が高くて唾液が少なく、小太りは低温でグジュグジュだった。熱と湿り気の違いが、イヤになるくらいよくわかる。オヤジは吸うより舐めるほうに重きを置き、若造はとにかく吸いたててきた。引っぱる力とワイシャツの押さえとが妙な綱引きを見せて、双乳を微妙に揺らしてい

る。車窓から流れてくる朝陽のせいで、下乳から脇腹にかけてのラインも透けていた。
（……くぅ……う……うっく……い、いつまで……赤ん坊に戻ってるのよ……）
レイカが電車の揺れにかこつけて上体を捻りかけた寸前、じゅぽん、とトイレ掃除じみた音を立ててふたつの頭が離れていった。
『うわぁ……こりゃ、エロいな……』
ロンゲが口笛を鳴らし、メンバーたちが賛同のため息を漏らしている。
ひとくちサイズの布地が濡らされて、乳暈にベッチョリと貼りつき、いかにも生意気そうな尖りぶりやアダルトな粘膜の色をオブラートに包んで披露している。そのまんなかに残されているネクタイが、何かのまちがいじみた印象を強めて、いっそうの艶めかしさを醸しだしている。
『だろ、だろ？　ハダカ剥きよりもさー、こーゆーのの方が、本道だと思うわけよ！　やっぱ、表向きはそのままにしとかないとよー！』
グラサンはお絵かきを褒められたガキみたいにハシャいでいたが、レイカが平然としているのを見て訝しげに顔を曇らせた。柔らかくも弾性のある内容物を、双乳の付け根から頭頂に向けて何度か揉みあげて、
『あんた……ひょっとして、胸は感じねーのか？』
『し、失礼ね！　あなたたちが下手なのよ！』

『……くそ、やっぱりデカさと感度は反比例しやがるよなあ』
しょんぼりと呟き、双乳から両手を離してくる。
（……よしっ！）
レイカは、いらだたしげな表情のしたでガッツポーズを決めた。
気づかれずに乗りきった。あとは、コイツらの注意を別なところに向けさせればＯＫだ。さてどのように乱れてやろうか、と演技次第を考えていると、グラサンが腹側のスカート裾をたぐり寄せて、もともと捲りあげていた後ろ側とともにばっ、と持ちあげてきた。そのまま脇のしたあたりに、クリップを使って止めてしまう。まるで花びらを裏返されたチューリップだった。冷房の風が直に下りてきて、レイカの頬に抑えきれない朱を散らす。
『……き、キミぃ！　痴漢はモロだしにしないんじゃなかったのかい？』
小太りの美学に反するしかけだったらしい。
『うるせーなー……オレは胸以外どーでもいいんだよ』
『まあまあ、２人とも。もうすぐ次の駅……選手交代になるんです。争っているヒマがあったら、楽しみましょうよ』
背広姿が、彼よりは若い２人を取りなす。課長が係長と新採の口論をなだめているような光景だった。３人は妙な団結を取りもどして、レイカの股間に指を伸ばしてくる。
（これは、もう……痴漢じゃないわね……）

運転中の車内で堂々とスカートを捲りあげ、「窮屈」以外の制約なしで嬲ってくる。ここまで度を超していると非現実感に憑かれて、被害者意識が薄れていく。世間一般で考えられているのとは逆に、ちょっと尻を撫でられたぐらいの被害者の証言よりも、ヒドい目にあわされた女性のそれのほうがあやふやなのは、この遊離感のせいなのだろう。

背広姿が、タマゴをつかむような手つきで、脂肉の奥にたくましさが隠れた内腿を撫であげてきた。指先と爪だけを使ったくすぐるような愛撫は、この中年が場慣れしていることを教えてくれる。小太りはスマートでいながら量感たっぷりの尻に専念するらしく、キメ細かい肌触りに鼻息を荒げていた。弾力性を秘めた尻たぶに五指を食いこませて、ハート型の輪郭に弧状の凸凹を生じさせる。

『……まだるっこしいな、さっさとやれよォ！』

グラサンがショーツのバック、Ｔ字にヒラヒラをつけたような黒布をわしづかんで、思いきり引っぱりあげてきた。

『……くッ！』

胴の底にクロッチが食いこみ、尻の谷間を露わにする。大陰唇が内に潰されて、むっちりとしたまるみをひけらかした。

『ほう、さすが自分の女体を囮に提供しているだけありますね……入念に手入れされているようです』

背広姿がピッチリと貼りついたレースを見やりながら、レイカの耳元に囁いてくる。言葉にして確かめることで興奮するタイプなのだろう。象牙と脂身を練りあわせたような内腿から手を離し、露わにされた秘唇をなぞりあげてくる。股布を割れ目のなかにこじ入れて、さらにその全貌をひけらかそうとして穿ってくる。

チャンスだ。

レイカは「んっ！」と熱っぽくこぼして、いかにも取ってつけたように視線を逸らせた。それまで硬直ぎみにさせていた背筋をくねらせ、腰を揺らし、膝を不規則に上下動させる。背広姿とグラサンがそれに気づいて、両手を止めた。小太りは別世界の住人だ。かまわず、ひたすら尻たぶを揉みたててくる。

――次は新百合、次は新百合です。

電車が駅に止まり、新たに乗客が雪崩れてきた。

ぎゅう詰めの車両隅では何の変化もなく、一人の美女に対する痴漢劇はバレるそぶりも見られなかった。乗りいれに合わせて痴漢グループ内でのローテーションがなされ、背広姿、小太り、グラサンが壁役にまわり、それまで壁を務めていた角刈りとのっぽがレイカの前後に陣取る。交代まぎわ、背広姿が角刈りに対して勝ちほこったように言伝した。

『……この女、どうやら浅瀬が好きなようですよ』

角刈りが、硬派そうな外見からは想像もつかないニヤけぶりを示す。

『な、何言ってんのよ！』
かかった。
口では否定を叫びながら、喉の奥ではほくそ笑んだ。
ホントは浅瀬も深奥もなかった。レイカは、膣では感じないほうなのだ。好きなのはクリトリスや鎖骨や耳たぶなど、引っこんでいるよりも突きでた部分だった。
（単純なヤツらよね……ちょっとばかり大げさな変化を見せるだけで、感じているとカン違いしてくれるんだから）
痴漢たちは、これでアソコを穿るのに血道をあげるだろう。そんな愛撫、いくらされたところで痛くも痒くも心地よくもなかった。心配なのは、全員がキチンと爪を切り、清潔にしているかどうかだ。メンバーと思しき全員がレイカに触ったら、そのときこそ――。
――……タタタ、タン、タン、タ――――ン！
電車が動きだし、角刈りがショーツの真上から手を差しこんできた。
『おーい、それダメ。私にはそれ、とても良くないと思われるな』
のっぽが美尻の谷間に指を滑らせながら、角刈りの手つきに注文をつけてくる。
『ショーツに手を潜らせるときはね、サイドからだよ、サイドから』
『……』
『横からクイッ、と差しこんでクロッチをシワシワによじる……股ぐりとクロッチの抵抗

を味わいつつ弄(いじ)る……それでこそ、襲撃のダイナミズムを味わえるんじゃないか。真上からなんて安牌ばかり引いてるようじゃ、痴漢として成長しないよ?』

『……』

角刈りは無言で手を差しいれ続け、レイカの曲面を覆ってくる。トイレ以外では露わにされることのない部分に外気が流れてきて、凌辱されている実感を高めた。容貌にふさわしく無骨な指が、短冊型に切りそろえられた恥叢を少しだけ掻きまわし、魅惑的な肉の坂を優しく滑りおりてくる。

無視を続ける角刈りに対し、のっぽはこれみよがしにため息をこぼした。「無粋な人だなあ」と呟いて、本人は宣言どおりサイド攻撃をしかけてくる。尻たぶを撫でまわし、むっちりとしたふくらみに挟まされた谷間を滑りおりてくる。

『……や、やめてよっ!』

レイカはいかにも狼狽したように叫んで、拘束された身体を暴れさせた。ギチギチとつり革が鳴るが、あちこち押しあいへし合いしている喧噪のなかでは蚊の鳴くようなものにしかならない。角刈りとのっぽは意に介さず、身体を密着させて動きを封じ、前後から女の急所を挟みうちしてくる。

先にポイントまでたどりついたのは、のっぽのほうだった。体型にふさわしい枯れ枝の指が、何とレイカの肛門をゆっくりと撫でまわしてきた。

昂奮に炙られた視線と、牡の押しつけがましさを体得しつつある声とが、レイカの隠しきれない綻びを丹念に拾いあげてくる。
――ああっ、胸の先っちょが……先っちょが……。
――あれは、やっぱり……乳首だよな。乳首が……立っているんだよな……。
――か、かかか感じている、ってヤツ？
『……違うわよっ！』
レイカは、のたうつ胸の底で吼えた。
『おや、違うんですか？』
その否定を待っていたかのように、愛撫がエゲつなさを増す。微妙に角度を変えられるライダースーツが、車窓から差しこむ光を反射して、ときおり少年たちの眼を打った。まぶしげに顔をしかめる者は、つまり双乳の視姦者たちだ。思いのほか多くの生徒たちがまぶしそうにしたので、レイカはショックを受けてしまった。
「……ふっ……ふうぅ……」
まるで放屁のように漏れた鼻息には、どう聞いても妖しい脱力が含まれていた。学ランの林に衝撃のこだまが走り、青い吐息にまぎれもない劣情の炎が灯る。唾を飲みくだす音が、あちこちで輪唱した。少年たちは隣近所にレイカの媚態を耳打ちし、視姦者をネズミ算的に増やしていく。

『ふふふ、これでもまだ……シラを切るんですか？』
『……シラも……何も……かっ、感じてないわ……』
絞りだしたような反駁に答えたのは、もっとも尖端を弄っている手だった。それまでは乳暈ギリギリで引きかえしていた五指が、一段盛りあがっているサークルに侵入する。キウイを押しつぶすように、ゆっくりと加圧をかけてくる。
「……ッ……くぅ……ふッ！」
サングラスで隠していなければ、力いっぱい閉ざしてしまった瞼や八の字に垂れさがった眉を、つまりは耐えかねている女の顔を見られてしまっただろう。指先が、乳首に触れないよう細心の注意を払いながら乳暈をなぞってくる。黒革がちょうど良い緩衝材になって、貝の足じみた摩擦は、とにかく性感をささくれ立たせてきた。レイカは顎を引き、背筋をS字にたわませた。
『ほら、もうすぐ……レイカさんがいちばん大好きなところに触れますよ』
『す、好きなんかじゃないっ！』
この反駁に、どれほどの説得力があっただろう。
『……もしも、レイカさんが正直になってくれるなら』
千手の声にせせら笑いが響いてくる。
『そこには、触らないであげます』

『……』

『いま、ここで、弱点を弄られたら……ふふふ、どうなるんでしょうね？』

耳の後ろが、急速に冷えていく。そのくせ、こめかみは熱く息づき始める。乳首を責められたら、どうなる？　目を皿のようにし、鼻息を荒げている少年たちのまえでそんなことをされたら――。

『さあ、答えてください……レイカさんは胸が弱いんですよね？』

規則的にくり返されるレールの音が、このときばかりは憎たらしかった。目の奥に脂汗が貼りつくような気持ちを味わいながら、

『……くないわよ』

レイカは、ぼそりと念じていた。

『何です？　ノイズが多くて、ちゃんと聞こえなかったんですが？』

下唇を切りそうなほど噛んで、キッと顎をあげる。頬に走る石英質の緊張に、少年たちが狼狽したような身動ぎを返してきた。

『別に弱くないわよ！　もちろん、感じやすくもないわ！　あんたの妄想を押しつけられても、ヘドが出るっていうのよ！』

一気に吐きだすと、肩で呼吸をした。よほど気張っていたらしい。実際に声には出していないのに、余韻で腹筋がヒクついている。

『……そうですか』
相槌が返ってくるまでに、沿線の電波塔を通過していた。
『では、ここで揉みほぐしてもかまいませんね？』
『……そ、それは……っ！』
レイカは、後悔する時間すら与えられなかった。腫れあがっているのが丸わかりの肉芽を、親指、人差し指、中指が三方から押しつぶしてくる。スプーンの裏を使ってイチゴを潰しているような力加減は、レイカがもっとも苦手とするものだった。
「……くッ！」
キリリとした表情が、あっけなく崩壊させられる。あからさまな内股になった美女を、少年たちは目を皿のようにして見やり、
――ビクビクっていった！　ビクビクって！
いまにも鼻血を噴きそうになっていた。
『ふふふ……いまのは電車が揺れたからですよね？』
『……き、決まってる……でしょ……』
『そうですよね、決まってますよねえ』
3本指が、突起を本格的に嬲り始める。親指と中指で挟み、指の腹で転がす。空いた人差し指は、頂面を細かく引っかき、あるいはスーツのうえにまで顔を出した切れ目に爪先

を差しいれる。乳首だけを徹底的に苛めると、続いて乳暈ごと摘みあげて、前方に向けて力いっぱい引きのばす。もちろんライダースーツのおかげで、荒々しさはスパイスの利いた愛撫に和らげられている。

後景に引いていた双乳じたいの揉みこみも、また激しくなってきた。胸肌は汗みどろになっているらしく、革の内側で濡れた音がする。玉の汗が谷間を通り、ヘソを舐めて草叢の露に合流していた。股間のあたりに違和感があるのは、きっと気のせいだ。そうに決まっている。そうでなければならない。

「……ッふ、ふぅッ……ふ！　っくふ、ふううぅッ！」

背筋が反りかえり、胸を前方に突きだしているポーズになってしまった。少年たちの歓声が、脳裏に突きささってくる。視覚的なイメージで表現するなら極彩色の嵐としか言いあらわせないそれが、爆発を迎えた。

――ああっ、チャック！　チャックが動いてるっ！

天井から腕が降ってきて、喉まであげていたファスナーをゆっくりと下ろしてきたのだ。密閉されていた女肌のすき間に冷たい空気が流れこみ、火照りと濡れぶりを思いしらせてくる。張りと疼きのせいで耐えがたいまでに膨らんでいた窮屈さが薄れ、吐息をこぼしたくなるような解放感を味わわされると共に、

――谷間……汗でベトベト……うわ、エロい……。

少年たちの、純粋な情欲にさらされる。彼らは独りでにファスナーが動いた不可思議など、まったく考えていないらしい。思いがけず立ちあえた官能スペクタクルに、ひたすら意識を奪われている。

スーツ越しにとり憑いていた6匹が消え、背後から新たに登場した2本が銀色の縁に潜りこんでくる。両腕を交差させてヘソのあたりにX字を描き、右手で左乳、左手で右乳を、それぞれ握りしめてきた。肌と肌の擦れあいだけがもたらしうる懐かしさが、レイカの歯茎をほの見せ、目の錯覚でも何でもなくスーツの表皮に浮かびあがった手の輪郭が、少年たちの理性を狂わせる。

――揉め！

剣闘試合を見ているローマ市民たちの雰囲気だった。

――揉んでよ！　揉みくちゃにしちゃってよ！

ヤりたい盛りに抑圧された少年たちの高電圧が、レイカの脳裏に流れこみ、千手のオカルト能力を高回転させる。壁から生えた手が、若い獣たちのリクエストにお応えした。

「……あ！」

予想以上に大きな声が漏れた。紺色の波間に浮かぶ顔が、軍隊的な乱れのなさでこちらを向いてきた。周囲の視線がいっせいに集められ、物理では計測できない方法で温度をあげる。耳たぶが真っ赤に染まりあがる。

（くうっ……あたし……あたし、ホントは……！）
あと少しで弱音に落ちてしまいそうな吐息をこぼした途端、ここぞとばかりに乳首を捏ねられた。
『……ンあっ！』
ガクンと膝が抜けて、千手観音に抱きかかえられてしまう。
『ほら、やはり弱かったじゃないですか』
千手はわざとつまらなそうに呟いて、乳首を嬲り続けてきた。人差し指と中指のあいだで挟み、指を反らせて根本から引きのばしつつ、ブルブルと揺すりたてる。谷間の見えそうで見えない指数が急上昇し、少年たちの鼻息が湯気に比せそうな濃さを弾きだしている。視線の集中砲火は、物理的な撫でまわしに近かった。
『よっ……弱くない……わっ……！』
叫ぶ声が、どうにも頼りない。腰が震えて、体勢を持ちなおすことができなかった。いままで強引に押しころしていた喜悦が、ビクつく腰の裏を伝って子宮に潜りこみ、筋肉たちのダイヤグラムを乱している。
「……ぅあ……あ……ふッ、ふぅっ！」
引っぱられていた乳首が、一転して乳肉のなかに埋められた。親指で乳頭を陥没させられた状態で、力まかせに揉みしだかれる。レイカの乳首は、それこそ満員電車に放りこま

れているかのように自らの乳肉たちに圧され、捏ねられ、潰された。突起も土台も、互いに力をぶつけ合う悦びに気づかされ、性感の自家発電状態に陥らされる。レイカは夜空色の髪を振りみだして、心のなかで嬌声を噴きあげた。

『あっ、ああっ！　あああっ！』

千手が再び乳首を突きださせ、親指と人差し指の腹でしごきあげてくる。男性器で自慰に励んでいるような摩擦ぶりが、レイカの気骨をごっそりと削りとっていった。ちょうど駅間の中間点にあたるカーブにさしかかって、車内が軽くローリングする。囮捜査官の身体も、予想外の方向に流された。乳首をしごきたてる動きが絶妙のタイミングで重なって、レイカは不覚にも天井を突きぬけていた。

『……ック！』

乳首からほとばしった光が、プルプルわななく胸のなかで乱反射して、ダイアモンドの輝きじみた多面性を持ちながら脳の底を照らしてくる。首筋がパッと染まり、眉間のあいだで空間がねじ曲がった。

（……う……ウソ……こんなあっさり……き、気づかれないようにしないと……）

股のあたりが、甘痒くてたまらない。朱唇を噛みしめつつ、手足の先からゆっくりと緊張を吐きださせた。だいじょうぶ、それほど激しく反応してしまったわけではない。バレたりはしていないはずだ。

『……レイカさん』
呼びかけの続きは、ニヤニヤ笑いだけだった。
『……く……何よ……』
『いいえ、別に』
『……何よっ！』
『いや、まあ……何でもありませんよ』
どうやら、バレてしまっているらしい。
『くっ……』
いまだかつて味わったことのない強烈な屈辱感が、胸の底でトグロを巻く。
『……ゆ、許さないわよ』
レイカは犬歯を光らせた。
『あたしに、こんなマネをして……あとで、覚悟していなさ……』
双乳の揉みこみが変わった。
『……あああっ！』
乳首を親指と人差し指で摘みあげ、飴細工でも作っているみたいに転がしてくる。残りの指で、乳房をゆっくりと搾りあげてくる。胸骨側から尖端に向けて、巨大な幼虫が身をよじらせているかのように、タプンとした中身をうねらせてくる。

『負けおしみはやめて、もう降参されたほうがいいと思いますけれどね……レイカさんの脆いところは、すべて把握しましたから』
『ああっ、そ、そこっ！』
乳首の根本。副乳あたりのくぼみ。下乳に浮きだしている静脈の交点。
『そこはっ……あーっ！』
押されるだけで、歯が浮きあがる。揺すられると、舌がせりあがる。揉みこまれたら、喘がずにはいられない。
『またイッてしまったんですか？』
『うあ……ああっ……ち、ちがう……ちがう……』
『そうですか……でも、陪審員の方はどう判断してくれるのでしょうね？』
少年たちの視線は、執刀医のように残酷だった。
――エロいよ……ああっ、オレもう……シゴきてぇよ……。
――……これで、2週間はオカズに困らなそうだな……。
『……う……うあっ、あああっ！』
叫べない分、口のなかに涎が溜まる。視界はぼやけ、背も汗みどろだった。肩が落ちつきなく上下し、足の付け根がガクガクと震えている。
『だから、ムリしないほうが良いと言ったんですよ……ガマンしようとすればするほど、

いざ崩されたときには歯止めが利かなくなるんですから』

千手はぬけぬけと小言をぬかし、飽きもせず双乳を捏ねあげてくる。炙られたハチミツのような快感を搾りだしてくる。鎖骨のくぼみに汗が溜まり、奥歯がカチカチと鳴る。

『あああ、ど……どうして……』

その念には、もはや猛々しさの影はなかった。秘密を暴かれ、弱みを握られ、心身ともに畏縮せざるをえない者に特有の震えが走っていた。

『……どうして、わかったのよ……！』

それが決定的な敗北宣言であることにも気づかず、レイカはふくらみから込みあげてくる快楽を無視したいがために、頭のなかで怒鳴っていた。

『レイカさんの仕草から推測できましたよ……さりげなく、胸を庇うようなアクションを取っておられましたからね』

『……くぅ……もう、や……やめて……』

揉まれる。

延々と、執拗に揉まれ続けている。

性感帯の塊と化してしまった双乳は、ピラニアの群れに襲われているかのようだった。

『……うぁ、あああっ！　あっ、あっ、あっ！』

呼吸そのものが、スタッカートに支配されていった。視界が歪み、脳が揺れる。乳肉が

圧迫されるたび、全身の血流が反旗を翻して、体温を乱高下させられる。黙っているとあられもない叫びをあげてしまいそうで、レイカは下唇を噛みしめた。声を封じた分、額が風船のように膨らんでいきそうになる。

『……あーっ！』

乳首を潰す一撃一撃が、胸のふくらみを串刺しにした。内臓を灼いて背まで抜けていく快楽の芯に、揉みこみの刺激がぶつかってきて乱反射をくり返す。胸全体に満ちていく悦びの波が、電車の揺れと共鳴して身体の隅々まで広がっていく。

――おい、そろそろ翔びやがるぜ！

牡としての本能が、女体に満ちる特別な緊張を嗅ぎとったのだろう。無数の視線が額の汗や小鼻のふくらみや首筋の微痙攣を確認し、魂の宙返りを焼きつけようと気張りだす。

『ああっ、ムネっ！　胸ぇ、揉まれてぇっ……』

あまりにも高まりすぎたボルテージを下げるためには、どうしてもその卑語を思いうかべなければならなかった。目の奥のさらに奥に力を込めて、レイカは思いっきり念じた。

『……イクッ！』

爽快さと悔しさが、光の速さでいり乱れる。唇の密閉が破れて、端から熱い涎と吐息がこぼれ落ちた。全身が反りかえり、日常生活ではありえない痙攣をさらけ出す。

「……ッ……く……くッ……！」

かろうじて音声化は堪えたものの、惚けた表情と紫唇の端から垂れる涎からして、恥ずかしい天国に到達していたのは火を見るよりも明らかだった。
『ようやく素直に白状してくれましたね……レイカさんは、胸が弱いんでしょう？』
『くぁ、ああ……そ、そうよっ！　だ、だからぁ、もう……ック！』
千手は気骨の綻びに食らいつき、レイカの胸だけを徹底的に蝕んでくる。
『うあっ、ま、またっ！　また胸でぇ……』
声に出して吐きだせないからだろうか？　レイカは、絶頂から下りられなくなっていた。
『……イクッ！』
放物線が終わりかけたところで、また新たに打ちあげられる。
『イクッ、イクイクイクゥッ！』
乳肉が対流するごとに脳が白く沸騰し、腰の奥が黒く煮詰まっていく。
『も、もう……やめてぇッ！　これ以上されたらぁ……』
レイカがどれだけ切羽詰まった調子で哀願しても、魔性の手は、決して責めをやめようとしなかった。ガマンの垣根を取りはらわれた双娘は、次の駅に着くまでひたすら揉みしだかれ続けた。

※

電車が紫光寺に着き、座禅ツアー帰りの老人たち第二波が乗りこんできた。生徒たちは

スペースを作るべく、というより、それを大義名分にして、レイカのそばに近寄り、車両隅の羞恥ショーをより堪能しようと謀ってきた。
それにあわせて、痴漢たち――千手の「手」たちもフォーメーションを変えてきた。天井からトコロテンを押しだすように、床から噴水のように、新手が伸びてきたのだ。
上から降ってきた腕は、脱力しているのが丸わかりの肩を抱きかかえ、レイカの首を撫でてファスナーの裂け目に侵入し、ヘソを穿り、スーツとショーツの狭いすき間にその指先を潜らせてきた。下から生えてきた腕は、折れまがった膝を押さえ、フラついている腰を支え、人形を固定するスタンドめいた役割を果たしてきた。
――おいおい、股間が盛りあがったぜ？
――……なんか潜りこんだみたいだね。
天井から伸びた腕はショーツの股布を吸盤みたいに押さえ、底に刻まれた溝に中指を押しあててきた。棒状の圧迫が、ショーツの濡れぐあいと秘唇の綻びぶりを教えてくる。レイカの頬に、屈辱の花が咲きみだれた。
（ああっ、このままだと……）
思わず漏れてしまった弱音と呼応して、股間の違和感が急激に膨れあがった。
「……ンっ、あ？」
先ほどの捕り物で証明したように、レイカは膣では感じないほうだった。「自分」を作

る最小単位のテリトリーである身体に入りこまれるのが、生理的にイヤでたまらなかったのだ。嫌悪感のブロックが働いているおかげで、快感どころか背徳感や粘膜性のかすかな疼きさえ、どれも門前払いだった。

だが。

いまは、それよりも強い感情を懐かされている。

少年たちの鑑賞眼に囲まれて、かつてないほど羞恥心を燃やされているのである。

人間の感情は総量が決まっており、ホントに哀しんでいるときは笑えないし、とことん嬉しいときは怒れない。あまりにも恥ずかしいときは、嫌悪感を搾りだせない。

（……あ、あれ？　ちょ、ちょっと……どうして……？）

感情を堰きとめていたブロックが消えてしまえば、そこは女体のなかでも敏感きわまる粘膜の層だった。しかも胸を弄られ続けているせいで昂ぶり、血流を増してふっくらと蒸れあがっている。さらに天井と一体化している腕は電車の振動を伝えて、指先を絶妙な力加減で振動させてくる。

『……ど、どうして……こんな……』

ふつうではありえない環境がもたらした、悪魔的な化学反応だった。もちろん、レイカが望みもしなかった変化である。その心とは裏腹に、一度変化してしまった身体は元に戻らない。熱を帯びたタンパク質は固まり、悦びを知った性器は貪欲になる。

千手のほっそりとした指が、薄布をゆっくりとくじりあげてきた。
「……ぅあ！」
ゾクン、と背筋が沈みこんでいくような震えが来た。マズい。これが何の予兆なのかわからないほど、レイカは未通女ではなかった。指の屈伸はすばやさを増し、イモムシの匍匐から陶工のテクニックへと成長を遂げる。目覚めてしまった秘唇が、脈打ちにあわせて悦びを送りだし、腰の裏をじっとりと重く感じさせてくる。
『……ふふふ、そろそろポーズを変えましょうか』
天井と床から伸びる手が、震えるレイカをその場で回転させてきた。周囲の少年たちが、大げさなくらいにざわめき、隣と肩をぶつけたり、あるいは足を踏みつけたりしている。レイカの新たな体勢が固まるやいなや、多くの少年が舌打ちをし、幾人かが喝采をあげた。
――なんだよ、あの巨乳を拝めねえのかよっ！
――ケツ！　ケツケツケツぅ！
レイカは千手の腕に引きずられ、車窓と向かいあい、上半身をベッタリと窓にくっつけさせられていた。両手を顔の高さに引きあげられ、掌全部を押しつけさせられる。そのまえにスーツのファスナーを下げられていたので、胸が完全に露出して、冷たいガラスにぴったりと密着させられていた。外から見れば、壁に貼りついたタニシのような様が、まる見えになっているだろう。押しつぶされた乳首に電車の揺れが浸透してきて、何もされな

くても眉間に縦皺が寄っていた。

そして車内の側から見れば、レイカの格好は洋モノ＝ポルノ雑誌でお馴染みのポーズだった。後背位での貫きを待ちこがれて、お尻を突きだし媚びを売りまくっているその姿は、マニッシュなコスチュームとのギャップのせいで、いっそう淫靡さを醸しだしている。迫力ある臀部に浮いたショーツの線が、黒革の中身に対する想像を掻きたて、少年たちの獰猛さを煽りたてた。車両が川野辺駅に滑りこんだときには、いまにも女体に手を伸ばしかねない雰囲気だった。

対岸のプラットホームに立っている数人が、窓に押しつけられた剥きだしの双乳を見て、ギョッとしたように硬直する。営業マンと思しきサラリーマン＝コンビの片割れが、レイカを指さして隣のスーツを引っぱっていた。「注視」というノンタッチの愛撫が、レイカの平常心を酸のように蝕んでくる。

車内の少年たちは窓に頬を押しつけて、尖端の薄紫色を拝もうとバカバカしくも真剣な努力を重ねている。耐えきれなくなった一人が飛びおり、対岸のホームめがけて駆けだした。彼が性欲に委せて階段を駆けのぼり、ポスターだらけの通路をダッシュし始めたところで『運命』が鳴りひびき、電車は毒気に当てられた少年を残して動きだした。彼ははたして、念願の乳首を目撃できたのだろうか？

『……うーん、やはり若い子の劣情は激しいですね』

引率教師の怒鳴り声を聞きながら、千手がのんびりと評してくる。
『ただ、激しすぎて……とらえ所がないですねえ。サラリーマンの集団でしたら、皆さん、ちゃんと「痴漢のイメージ」というものを持っておられるので、その情欲を「手」の形に固められるのですが……』
レイカの身体を拘束し、股間をまさぐっている無数の腕たちが、不気味な蠕動(ぜんどう)をくり返し始めた。スーツやワイシャツの袖が溶け、全体のフォルムが流れていく。その反面、肌色が濃くなって影じみた色になる。
『……こうも激しいと……暴走しますねえ』
ドン、とレイカにしか聞こえない轟音を立てて、天井から腕になり損ねた肉塊もどきが降ってきた。ウロコのないヘビの大群がスーツの隙に突入し、まるで粘液のような抜け目なさで女体の隅々まで潜りこんでくる。
「……くひぃっ！」
あられもない叫びをあげてしまった。
（な……なに、これ……手じゃなくて……舌？　いや、舌でもないけどっ……）
少年たちの見境のない劣情が、レイカほどの女体をまえにしてひとつのアプローチで満足できるはずもなかったのだ。撫でたいし、揉みたいし、舐めまわしたい。噛んだり、叩いたり、縛ったりもしてみたい。とにかくその艶やかな肌を覆いつくし、瑞々しい肉を弾

ませたい。どこもかしこも、ありとあらゆる手段で味わってみたい――。

欲望の奔流は、リビドーを具象化したかのごときグロテスクな形態をまとって、レイカに襲いかかってくる。ピッチリとしたコスチュームを着ていて、少年たちの脳裏に「すき間がなさそうだ」というイメージを与えていたのも、不定形ぎみになった一因であろう。舌の粘膜質と指の力強さを兼ねそなえた責め具が、スーツの内側で柔肌を舐めまわしてきた。脇のしたが穿られ、筋肉質の背が舐めまわされる。親指ほどの太さのそれが、ショーツに潜りこんで尻たぶを揉みほぐしてきた。

『……ああっ、だめっ！　だめっ、やめてぇっ！』

足腰に力が入らなくなり、レイカはズルズルと頽（くずお）れていく。壁に胸を貼りつけ、窓を肉の雑巾で拭きおろしながら、その場に跪（ひざまず）いてしまった。双乳のクッションから染みでた生汗が、ガラスのうえにいやらしい習字を残している。少年たちに見下ろされる形になって、視姦の破壊力がさらに増した。

『おやおや……囮捜査官とあろうものが、演技を忘れていいんですか？』

『だっ、だってっ！　こ、これじゃ……ああっ、こんなのぉっ！』

劣情で編まれたヘビたちは、もちろん股座にも押しよせていた。足の付け根を舐めあげ、内腿を撫でまわす。秘裂を擦りあげていた手が指ごとのヘビに分かれて、すっかり濡れそぼった股布のなかに潜りこんだ。

「……うあ……あ、ああ……あああ……」
レイカの紫唇から、ついに喘ぎが漏れ始めた。
――おおおーっ！
少年たちの歓声に呼応して、リビドーの化身たちが、官能の沼地を責めたててくる。小指と人差し指だったヘビが大陰唇に浮いた汗を舐めまわし、薬指と中指がラビアをなぞってきた。ぬめらかななかにもザラつきのある粘膜のヤスリがけは、何度も果てて敏感になっている女体には拷問そのものだった。2本指がトンネル探検を進めてくるだけで、腰の奥に雪崩れてくる疼きを堪えきれず、物言いたげに尻を振りたくってしまう。恥叢の付け根がチリチリと痛み、秘裂が果物じみた蜜を吐いて、車内の空気を味付けし始めた。
『ああっ……こんなところで感じたくないっ！　感じたく、ないのにいっ！』
残っていた親指が、秘唇の上端に鎮座していた突起を、荒々しく捻りあげてきた。
「……あーっ！」
レイカには、自分の放っているものが声なのか念なのか、判別つかなくなっていた。涙の膜が降りてしまった両眼は、流れいく景色も見えなくなっている。
「あーっ、あーっ！」
ヘビの親指が、イヌの鼻面みたいに痼（とど）っていたクリトリスをしたから押しあげ、包皮と指の腹でサンドイッチにして、解剖的な確かさで擦りたててくる。内側からの加勢もあっ

て、恥骨が金属的に痺れた。胸を揉まれ続けているうちに下降していた子宮が、スイッチを押されたみたいに痙攣する。
「……イ……ク……」
懸命に押しころしたにもかかわらず、歯の噛みあわせから漏れてしまった。肺の中身が溶けこんでいそうな呻きだった。
――……うわっ！　うわっ、うわわわわっ！
――ホンキの声って、案外……低音なんだなぁ……。
夢にまで見たナマのアクメ声、しかも、その発声者は垂涎モノのお姉さんなのだ。エリート校の宿痾（しゅくあ）として童貞だらけの少年たちは、収まりがつかなくなっていた。息も荒い一人が、レイカの肩に手を置こうとする。
「……あの……あの、ですね……その、だいじょうぶで……」
レイカが急に頭をのけ反らせ、逆しまの表情を向けてきた。伸ばされた手が中途で止まり、サングラスの陰から流れおちる熱い涙を見て、ビクッと引っこんでいく。キレイな鼻梁に沿って震えが伝わり、紫唇が脱皮したての生き物じみた身動ぎをさらして、
「……あああっ、イクゥッ！」
歯を食いしばっているときの充血した歯茎をかいま見せる。おどろに散った黒髪が頬や額に貼りつき、大切なものを失ってしまった人間の雰囲気を漂わせていた。肩に、腰に、

そして爪先に痙攣が走る。黒革が擦れてギチギチ鳴き、襟首のあたりからむわっ、と艶めかしい匂いが噴きあがった。

『ふふふ……レイカさん、声と念をまちがえてますよ？』

秘裂にわけいった指たちが、エモノに群がる寄生虫じみた貪欲さを振りまきながら、真っ赤に腫れあがり、しとどに濡れそぼった粘膜を掻きむしってきた。表面に浮きでた血管をつま弾き、天井を擦りたて、膨れあがったクリトリスを揉みほぐしてくる。

「……ック！　くぅっ、あうっ！　あーっ！」

突きあげられている腰だけが、しなりと粘りたっぷりの上下動をくり返して、少年たちの欲情を掻きたてた。体調を尋ねようとしていた少年は、もう何も言いだせない。彼を含めた何人かが、ズボンのポケットに手を突っこみ、反りかえった息子をラクな位置にズラしてやっていた。

――ど、どどど、どうする？　おい、どうすりゃいいんだよ？

欲望の実践方法がわからないチェリーたちの、哀しい限界であった。いざ目の前に三つ星のフランス料理を饗されても、ナイフとフォークの使い方がわからないのである。緊張と淫靡が不思議に入りまじっている沈黙を、のっぺりとした声が破った。

「……おやおや、どうされたのですか？」

ダークグリーンのスーツを着た男が、少年を掻きわけてレイカに近寄ってきた。

『第７章　9月■日（金曜日）18時00分　明鏡大学前駅』より

第7章　9月■日（金曜日）18時00分　明鏡大学前駅

後方支援の体制は、頼りないものにならざるをえなかった。

――曙線で人身事故にあった幽霊が、満員電車の車内に充満している男性客の下心を利用して、超常現象を用いた痴漢をくり返している。その幽霊を崇めている痴漢たちが、グループを作って集団痴漢に及んでいる。

信じてもらえるわけがない。

ただ、千手の正体を探りだす仕事では収穫があった。曙線では人身事故が片手で数えるくらいしか起きていないので、すぐに検索できたのだ。

金子隆（かねこたかし）、男、32歳、明鏡大学医学部付属病院の臨時事務員。

事故記録によると、千手こと金子はダークグリーンのスーツにワインカラーのネクタイ、そして黒い革靴という服装だったそうだ。どうやら靴をキレイにしておくのに異常なこだわりを見せていたようで、いつも簡易の靴磨きセットを持ちあるいていたという。

また、彼の痴漢容疑は真っ黒だった。その手口はかなり巧妙で、いつもグループで行っていたという。事件当日は被害者に執拗なアタックをかけていたらしく、車中のころからすでに揉みあう声が聞こえていたそうだ。

レイカは暗澹とした気持ちになりながら、千手こと金子の遺品リストを調べた。

ゆかりの言葉を信じるなら、ヤツの霊だか魂だかが居座り続けるための依代（よりしろ）となるものがあるはずだ。遺品のなかから「遺品として見つかっていないもの」を逆算するというのはかなり困難だったが、2、3の当たりはつけられた。

（……見つけたら、即ぶっ壊す……そして、幹部たちは警察に突きだす……）

細々とした作業を続けていると、時刻は17時になっていた。レイカは眦（まなじり）を決して立ちあがり、明鏡大学前駅に向かった。

駅に着くと、もう帰りのラッシュが始まっていた。夜の人混みは疲労の霞みをたゆたわせていて、心理的な圧迫感が強くなっている。舌打ちやため息を聞きながしながら、レイカは女子トイレに飛びこんだ。レイカが仕込み、千手に取りかえられたバッグを出して、ジッパーを開ける。

「……何よ、これ……」

詰められていたコスチュームを見て、レイカは絶句してしまった。

それは、思い出の一着だった。高校時代、毎日袖を通していたセーラー服。白のツーピースで、上はローウエストで、スカート丈は膝下で、プリーツは16本で、セーラーカラーと袖の折りかえしは群青色。学校指定の三つ折りソックスと、バレエシューズ風の革靴まで用意されている。

レイカは鏡のまえで頭を抱えた。
いくら何でも、もうセーラー服を着られるような年齢ではない。これを着てあの人混みのまえに出るなんて、それだけで死にたくなるくらいの羞恥プレイだ。囮捜査官としていろいろ恥ずかしい格好をしてきたが、それは肌の露出が多いとか女体のフォルムを強調しているとか、そういう意味での恥ずかしさであり、ＴＰＯならびに本人に似合うかどうかを無視したものではなかった。それにセーラー服というのは、「少女性」を刻印された特別な記号である。社会的文化的に、過剰なまでの価値付けがなされたものである。
「……」
指のすき間からバッグの底を覗いた。ポストイットが貼ってあった。
『その１。服装はバッグのなかに入っていたものを着ること。それ以外は認めない。もしも違反が発覚した場合、訓練は中断される』
（……このまま、闇に隠れてしまう、ってことね）
『その２。訓練は一駅ごと。次の駅に着くまで教官がイカずに堪えられたら、教官の勝ち。その場合、訓練者たちは速やかに自首する。この点に関しては私、千手が保証する。その３。審判者（＝千手）は、みどり台駅にて待つ。訓練終了後は教官、訓練者ともに、プラットホーム向かい側の上り電車に乗りこむこと』
そこが最後の決戦場か。レイカは掻きあつめてきた資料を漁り、千手が「ゴール」に指

定した車両をチェックした。

（やっぱり……朝のときと同じ車両が使われているわ……）

これで確認できた。千手はゆかりの言ったとおり、車両にくっついている幽霊なのだ。

こちらがヤツを追いつめつつあることに、気づかれてはならない。囮捜査とは、知っていることでも知らぬふりをし続ける捜査法だ。レイカは、腹を括った。自分だったら、幹部たちの攻撃ぐらい凌げるはずだ。

セーラー服の他に入っていたのは、いかにも学校が好きそうなフルカップ＝ブラジャーに総コットンのショーツ。レースも、フリルも、ワンポイントもない。ファッションとは無縁のアンダーウエアを着けるのは、数年ぶりだった。バストを完全にカップに詰めこんだときの窮屈さが、校則で縛られていたころを思いださせる。忌々しいことに、上下ともサイズはぴったりだった。

懐かしのコスチュームを手に取る。セーラー服ではなく、ツーピースと言いかえたくて仕方がなかった。掌に汗が滲む。吐息を漏らし、目をつぶって頭から被った。

恐る恐る目を開く。

鏡のまえに立っているのは、どこをどう見てもイメクラ嬢だった。

「……」

言葉にならない。言葉になっても声にならない。自分の鋭い顔つきと自慢のカラダが、

これほど恨めしく思えたのは初めてだった。自分一人で見ているだけでも、自然と頬が赤らんでしまう。

「……仕方……ないわよっ」

吐きすてるように呟いて、ソックスと革靴を替えた。伊達メガネを放りだし、髪をいつもの無造作ヘアに戻して、そのまま一気にドアを押した。アクションの行き足が残っているうちに動かないと、トイレから出られなくなってしまいそうだった。残暑の熱気に迎えられながら、ヤケクソの気分でホームに立つ。

周囲にどよめきが走った。

――……おい、何だありゃ！

――風俗の……制服なのかな？　着たままで出勤か？

レイカの頬が赤くなる。耳たぶの温度が上がり、頭皮が汗で濡れ始める。近くにいたOLたちのクスクス笑いに、胸がえぐられる。鼓膜の内側で、血流の流れる轟音がする。脳内に張りめぐらされた血管が、のたうっているようだ。

（……平常心よ、落ちついて、冷静にしていれば問題ない、後れをとったりしない……）

こめかみが熱い。目尻に涙が盛りあがってくる。

『……ふふふ、ちゃんと約束を守ってくださったようですね』

予期していたとおり、テレパシーもどきが流れこんできた。あたりを見まわしたが、こ

の人混みでは「金子」こと千手を見つけだすのはムリそうだった。だいたい、相手は幽霊である。実体があるのかないのか、いまひとつわからない。

『すっぽかされたら、大花火をあげようと思っていたところですよ』

『……もう充分打ちあげていると思うけど』

レイカは、あえて会話に乗った。というより、会話しているうちは周囲の声を閉めだせる。羞恥心に炙られずともすむ。

『ふふふ……気力、体力、ともに復活されているようですね。それでこそ、部下たちの訓練になるというものです。皆それなりの手練れですから、がんばってください……』

警戒心にムチを入れていると、電車が風を唸らせながら滑りこんでくる。巨大な運動エネルギーの蒸発が、セーラーカラーをひらひらさせてくる。

ドアが開いたとたん、朝のときも味わった土石流に捕らえられた。あっというまに流され、運ばれ、車両の右端あたりまで押しこまれる。レイカはつり革をつかんで踏んばり、隅に追いやられるのだけは避けた。千手のオカルト能力を考えると、壁を背にするのは危険だ。できるだけ人間に接していた方が安全だった。

乗客は、続々と乗りこんでくる。新たにレイカの姿を見かけた人たちが、ギョッとした視線を投げかけてきた。見つめられることがどれほど強いプレッシャーになるか、被心研の表向きの業務のサンプルになれそうだった。注意を向けられるたびに集中力を削がれ、

警戒網を解されてしまう。このコスチューム選択が千手の撒いた戦術であることに、今さらながら気づかされた。

満員電車の名物とも言えるなかなか閉まらないドアが、乗客たちをやきもきさせる。『運命』が鳴りひびき、エンジンが唸りをあげた。千手いわくの「訓練」が始まった。

（……一駅イカなければいいのよね）

とすれば、いちばん勝率が高いのは「明鏡大学前—紫園都市」の区間だった。所要時間は5分、最長の「川野辺—新百合」間の半分にすぎない。

最初でケリをつける。レイカが注意深くまわりを見やっていると、左右に陣取ったサラリーマン風の小男と大学生らしきデブが、不審な動きを見せてきた。レイカの姿をガードするように身を乗りだしてくる。

先手必勝だ。

そもそも痴漢路線として名高い曙線なのだ。過剰防衛ぎみにしたところで、何ら問題は生じない。レイカは容赦なく足を振り、サラリーマンの弁慶を蹴りつけてやった。爪先にガツッ、とプロテクターの感触がかえってくる。

レイカが足を戻すのと同時に、サラリーマンが両腕を封じようと襲いかかってきた。と見せかけて、デブが羽交いじめにしようとしかけてきた。

（……そのていどの連繋で、どうにかできると思ったの？）

レイカは両者のみぞおちにパンチを突きこみ、さらに背後から忍びよってきた気配に向けて注意を切りかえた。

しかし、それらすべてが囮だった。

本命は真正面、ロングシートに座っているポロシャツ姿の若者だったのだ。ポロシャツはレイカのスカートをまくりあげ、そのまま股間に顔を突っこんできた。

『……ッ！』

まったく予期していないアプローチだった。満員電車で座るというのがどれほどたいへんなのかわかる人間ならば、レイカの不注意を責められないだろう。慌てて反撃に移るより先に、スカートのなかに潜ってきた痴漢が舌を挿入してきた。

（な……ッ！）

いきなりの激しいしかけだった。男の舌は異様に長く、秘められた粘膜を傍若無人に掻きわけて、子宮の出っぱりまで達していた。さらに小陰唇と口唇を密着させて、尖らせた舌先で敏感きわまる子宮口を舐めまわしてくる。

さしものレイカも肩を震わせ、一瞬だが全身を弛緩させてしまった。その一瞬のうちに、左右の痴漢たちがレイカの両腕をつかみ、万歳ポーズに引きあげてくる。Ｆ１のピット作業に匹敵するコンビネーションだった。小男とデブは、レイカの手首をつり革に通させ、何とつり革の輪っかじたいを締めあげた。

（こいつら……つり革じたいにしかけを！）
電車の備品が、手錠のようなものに替えられていたのである。
『……驚いているか？　なに、たいした下準備じゃないさ』
背後の日焼けしたスポーツマンが、笑いの波動を流してくる。
『そもそもは、あんたが女子トイレから出てきてすぐのところに並ぶだろう、っていう予測から始まっているのさ。その格好じゃ、そんなに移動できやしないからな』
何段階もまえから罠が発動していたことを知らされて、レイカは歯軋りをした。
『あんたの待ち位置さえ決まっていれば、乗りこんだとき車両のどのあたりに行くかは予測できる。人の流れというのは決まっているものだからな。さらに、あんたは千手さんにヤられているんだから、隅っこには行きたがらないはずだ……ここまでわかれば、あんたのポジションは弾きだせる』
股座に顔を押しつけているポロシャツが、長い舌をそよがせ始める。鼻息が吹きつけられてきて、ショーツのなかに熱気と湿り気が溜まってきた。
『となれば、まえもってつり輪を取りかえ、かつ、上り線の段階からその位置に人を座らせておけばいい……ちょっとした工夫で、オレたちの部下を半減させた囮捜査官サンでも、あっけなく落とせる、ってわけさ』
饒舌に向かって、レイカは冷たく吐きかけた。

『……それで？　次の駅まで、あと3分くらいしかないんじゃない？』
『そ、それだけあれば、じゅ、充分すぎるんだな』
デブが、パンチを喰らった腹を押さえながら呻いてくる。
『と、徳山君の舌技は、か、神業なんだ。処女の子でも、鼻血まみれにさせられる……い、イキすぎて頭に血が昇り、は、鼻の粘膜から出血してしまうんだな』
『それにですね、レイカ教官』
背広姿の小男が薄ら笑いを隠しながら、
『千手さんに犯されて、タダですむと思っていましたか？』
その一瞬後、長い舌の中ほどあたりが、膣天井のある一点を擦りあげてきた。
『……ッ！』
わけがわからなかった。レイカは目を見開き、身体を反りかえらせた。前髪がクーラーの風向きに負けずに舞いあがり、眉間のあいだに乱れおちる。
『へへへっ、発見、発見！』
ポロシャツが、勝ちほこったように笑った。
問題のポイントは尿道の裏で、かつ太い血管が走っている部分だった。性感の経線と緯線が交わった、官能の大交差点である。ポロシャツがそこに舌腹を押しつけ、舌の表側ぜんぶを使ってゆっくりと刮ぎあげてきた。

『……うあああああっ！』
膣のなかに、これほど「くる」部位があったとは。
『あっ！　ああっ！　あっ、あっ、ああああっ！』
味蕾（みらい）のザラザラだけでも、肉襞がまるごと削りだされてしまいそうな気分に襲われる。恥骨が割れんばかりに震えて、セッケンをたっぷり含ませたスポンジを握りつぶしたみたいにジュワッ、と粘り気のある汗が噴きだした。いやらしい舌と膣壁のすき間をすり抜けるようにして蜜が流れ、ピッタリとくっつけられた口のなかに直行する。
『んー、いい喘ぎだ……千手さんはな、自分がモノにした穴のなかに、必ず地雷を埋めていくんだよ。それも、とびきりの、核爆弾なみのヤツをな』
『そ、そそそう。そ、そこを刺激してやれば、すぐイッ、イッ、イッてしまうんだよ』
日焼けとデブの解説じみた言葉責めなど、頭のなかに入ってこなかった。地雷とやらを舐りまわされるたび、膣のなかで凄まじいフラッシュがたかれる。暴力的な光は子宮の壁面に当たって乱反射をくり返し、レイカの女体を内から照らし、温もらせていく。
膝に力が入らなくなり、ガクンと頽れる。つり革がビンと鳴り、ポロシャツが太腿を抱えるようにして、レイカの下半身を支えてきた。淫猥な音が鳴りひびくが、レールの音と喧騒にかき消されて周囲には届かない。まわりにいるのは痴漢グループの残存者たちばかりだったらしく、あちこちで思わせぶりな目配せが花開いていた。

『へっ、コイツは極上品だぜ……天井のザラつきといい、襞の締めっぷりといい、ふつうのチンポじゃ1分保たないだろな。ツユもイイ匂いさせてやがるしよ』

ポロシャツの舌は、一匹の軟体動物だった。舌先で子宮口を磨きながら、舌腹では「地雷」を揉み、削り、えぐりたててくる。舌のどこで責める、というのではなく、舌のあらゆる部位を責めに動員してくる。

『あーっ！』

レイカは腰を踊らせ、激しく首を振った。膣から腰の奥まで突きぬけてくる悦びは、ムチの一閃すら想起させられる。あっという間に自信は砕かれ、余裕は崩れ、次駅のアナウンスをひたすら乞いねがう境地に陥れられた。

あと１００秒もないはず、信号を待っているていどですむはず。大口を開けてこらえきれぬ高まりを吐きだしては、必死の形相で奥歯を噛みしめる。あまりにもあさましい百面相だった。できるものなら歯をかみ砕き、その痛みで快楽を感じないようにしたかった。

めまぐるしく跳ねまわる夜空色の瞳に、車窓の変化が飛びこんでくる。クルマのライト、消費者金融のケバい看板、景観を破壊しているとしか思えないパチンコ屋の蛍光。一瞬たりとも止まらない変化が、脳の情報処理に負担をかけてくる。意地やガマンが少しずつ削りとられ、身体のコントロールがゆっくりと失われていく。

『……お、陸橋すぎたじゃねえか。あと1分だぜ、がんばりな』

保つはずないと信じきっている姿が憎らしい。憎らしくて悔しくてたまらないのに、しかし背筋を流れおちる脂汗は止まらない。足の付け根に走る妖しい武者震いを止められない。千手に精をやらされまくった記憶が、そのことを反芻してしまう肉が、つまりは自分のなかの「女」が恨めしい。

（ああっ、ダメ！　耐えるの……耐えてっ！　今しかっ……この路線しか！）

いちばん短いこの区間で勝てなかったら、この先は絶望的だった。レイカは太腿を踏んばり、ポロシャツの動きを鈍らせようとする。だが、ヤツにとっては願ってもない仕打ちだったらしい。舌はますます勢いづいてくる。それにどれだけ息もうとしても、地雷を舐られるだけで脱力感に喰らいつかれる。わざとスローモーに刮ぎあげられたときは、鼓動まで含めた全アクションを総リセットさせられたようだった。

――次は紫園都市、次は紫園都市です。

タイムリミットが聞こえてくる。レイカは、ひたすら到着を願っていた。きちんと止まらなくていいから、とにかく早く着いて欲しかった。

『……へへっ、そろそろ夢から醒ましてやっかなー』

両腿を抱えていたポロシャツの手が、恥叢を掻きわけて秘裂の上端に迫ってくる。電車の速度が緩まるのに合わせて、その地でわなないている突起に触れてきた。そのまま一気に、力を込めて押しつぶしてくる。指の腹と包皮にサンドイッチされて、元より痼ってい

た肉芽が、レイカの女体にしか聞こえない絶叫をほとばしらせる。
『……ッあ！』
ようやく悟った。
『あー……』
そもそも、これは勝負でも訓練でもなかったのだ。単なる制裁であり、拷問であり、レイカを淫獄に引きずり落とすための坂道にすぎなかった。どうして「何とかできる」などと思っていたのだろう？　千手にやられた時点で、もう二度と覆せない主従の鎖に繋がれていたのではなかったか。
『……ック！』
舌と指、膣壁とクリトリスの複合責めにあって、レイカはあっけなく散華を迎えていた。自分でも拍子抜けするくらいの脆さだった。内腿にけたたましい痺れが伝わり、静脈の浮きしずみをくり返しながら爪先まで伝わる。革靴のなかで足が丸められて、膝の後ろにいやな汗が滲みだす。
『イクッ！　いッ、イクゥッ！』
尻が跳ねおどり、清楚なスカートでも隠しきれない牝の振幅を披露する。ぷはっ、と深海から戻ってきた人のように口を開けると、紫唇の端から涎がこぼれた。レイカのチャーム＝ポイントたる下唇のホクロが、唾液に濡れてヌルヌルと照りひかる。甘やかな内臓臭

が立ちこめる。
『……へへっ、オレは合格ですよね……レイカ教官？』
ポロシャツがスカートから顔を出し、ベトベトになった口のまわりを拭った。その手のなかに、白い布地が握りしめられていた。
（……こ……股間が……涼しい……）
ポロシャツが、ショーツを切りさいて脱がしてしまったのだ。
『へへっ、千手さんに提出する合格通知っすよ……あんたにもペナルティがなきゃ、不公平ってモンだからね。負けるごとに、一枚剥いていくからな』
電車が止まり、再び『運命』が鳴りひびく。
『では、第2ラウンドといきましょうかね……』
左右のサラリーマンと大学生が、セーラー服とスカートの裾をつまんで、どちらも一気にたくしあげてきた。
『……ッ！』
吊るされた格好のため、両肩がピンと引きのばされている。脇腹も細く締められ、内股にならざるをえない秘所が、扇情的なVラインを描いている。人いきれでムンムンする車内のなかで、ほぼ全裸にされてしまった。場違いにして凄艶な姿は、おそらく外からも覗かれているにちがいない。

レイカの脳裏に、夜景が浮かびあがった。

夜の帳が下りたなかを、灯りをつけた電車が走っている。四角い窓の明かりが、次々と通りすぎていく。そのひとつに、全裸の女が立っている。年齢不相応なセーラー服のコスプレをして、グラビアモデルの双乳と蜜濡れた股をさらしている。公序良俗の敵とも言える痴態が、「すこやか都市」の街中を、市民のささやかな団欒が営まれている家々のあいだを、さも当たり前のように走りぬけていく――。

『あああ……ああ……こんなの……こんなのぉおおっ！』

屈辱まみれの絶頂を押しつけられておののきの止まらぬ理性が、一瞬にして蒸発させられた。レイカは、狂ったように暴れだした。だが両手の拘束に加え、密着状況という柔らかな拘禁服がすべてを吸収し、無効化してしまう。

『ふふふ……新たな都市伝説が生まれているかもしれませんね』

サラリーマンがうなじに鼻を近づけ、ソムリエよろしく匂いを嗅ぎ、続いて肘のあたりから舌を這いおろしてきた。大学生は苦労して腰をかがめ、露わになった腰骨のあたりに舌を押しつけて、ゆっくりと舐めあげてくる。上下どちらとも舌をヌラヌラと左右にそよがせながら、レイカの肌を摩擦していた。浮きだしていた汗が拭いとられ、おぞましい臭いを放つ唾液に置きかえられていく。

『やっ、やめてぇっ！　……ああっ、く、くすぐったいっ！』

骨のない生き物たちは、汗をたっぷりと溜めた脇に到着した。世代の違う痴漢たちがアイ=コンタクトを交わして、ていねいに処理された肌にむしゃぶりついてくる。口をまるごと押しつけ、脇の微妙なくぼみをすべて穿りだすように舐めまわしてくる。

『いやあっ！　ああっ、おかしくなるっ！　おかしくなっちゃうっ！』

くすぐったさと気持ちよさ、子どもじみた感覚とオトナのそれとが、コインの裏表のように入れかわる。どちらも負けじと、眉間の奥を掻きまぜてくる。脳細胞がパニックを起こしそうだ。髪を振りみだしているうちに、両眼から熱い涙がこぼれおちた。

『……お、おお美味しい！　ああっ、い、いい脇だよぉ！』

大学生のふいごじみた鼻息が、セーラーカラーを翻してくる。

『ふふふ、まったくですね……それに、凄い反応です……』

サラリーマンの左手がおなかを撫であげ、レイカのもっとも突きだしている部分に迫ってきた。厚手のブラジャーであるにもかかわらず、乳首はこんもりとテントを張って、恥ずかしい自己主張を続けている。節くれだった指が、関節まで持っていそうなそれを摘みあげ、ラジオのチューニングでもするかのように捻ってきた。

『……だめっ！　ああっ、乳首はダメぇっ！』

レイカは堪らず、サラリーマン側に身体を押しつける。それを見た大学生が左乳首を摘みあげ、右とは逆向きに捻ってきた。火のついたような嬌声を噴きあげて、レイカは乳首

で操られるマリオネットに堕ちてしまう。
『ふふふ……どうです、どちらが気持ちいいですか？』
『……みっ、右！　ああっ、ちがうっ、左ぃっ！　あーっ、右っ！　左ぃっ！』
『おやおや、ハッキリしてください。私と和田君、どちらがテクニシャンですか？』
どちらかを名指しすれば、あぶれた側がえげつなく捻ってくる。サラリーマンはソフトながらも乳首の芯を痛めつけるタイプの責めが多く、大学生は荒っぽいが、乳房ぜんたいにまで疼きや痺れが波及することをキチンと計算していた。
『……ど、どっちもっ！　どっちもよぉっ！』
『答えになっていませんよ……ほら……ほら、ほらっ！』
『ああっ、狂っちゃう！　乳首っ、乳首でおかしくなっちゃう！』
元からの弱点でもあったうえに、千手に徹底的に責められ、仕込まれてしまったのだからたまらない。かつての颯爽とした態度が何だったのか、と思えてくるほど、女捜査官はぶざまで哀れな痴態をさらし続ける。
『ハッキリしませんねえ……ここはやはり、キッチリと白黒つけましょうか？』
『さ、ささ、賛成！』
大学生が背に手を回し、ブラジャーのホックを外してきた。性感を高められて膨張していた双乳は、独りでにブラジャーを跳ねあげて、その艶めかしい勇姿をさらす。摘まれ、

捻られ、挫かれ続けていた乳首は、子どもの指みたいに尖っていた。左右の痴漢が再び無言のコンタクトを交わし、ビンビンに痼った性感帯をカッポリ、と含んでくる。
『……ック！』
ただそれだけで、レイカは肩が外れたかのような反応を見せた。腰砕けの状態を救うべく、背後のスポーツマンとロングシートのポロシャツが腰と腿を押さえている。
『……おや？　私たちは、早くも合格のようですね』
『ま、ままだ、7分はあ、あるんだな……』
2人は教官が軽く達してしまったことを笑い、それぞれ好みの愛撫に切りかえてきた。
（ああっ、ダメっ！　乳首っ、乳首はダメなのっ！　弱いのよぉっ！）
サラリーマンは餅の一気食いでも試みているかのように、できるだけレイカの尖端を呑みこんで、乳首を口中深くにまで吸いこみ、コリコリと甘噛みしてきた。奥歯を使った暴力一歩手前の激しさが、今のレイカには底知れぬ官能味に感じられてしまう。
『イクッ！　乳首でっ、乳首でイッちゃう！』
大学生は舌先を伸ばし、ぷっくりと膨らんだ乳暈から頂きの割れ目まで、まるでネコが魚の骨を相手にしているみたいに舐めまわしてきた。ときおりゲームレバー扱いされ、乳首の根本まで上下に倒されるたびに、レイカの背筋は快感で切りつけられる。ゾクゾクと魂まで脅かされるような甘さが、背骨を舐めまわして尾骶骨から抜けおちていく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/